業苦

嘉村礒多

青空文庫

只、假初の風邪だと思つてなほざりにしたのが不可かつた。たうとう三十九度餘りも熱を出し、圭一郎は、勤め先である濱町の酒新聞社を休まねばならなかつた。床に臥せつて熱に魘される間も、主人の機嫌を損じはしまいかと、それが譫言にまで出る程絶えず惧れられた。三日目の朝、呼び出しの速達が來た。熱さへ降れば直ぐに出社するからとあれだけ哀願して置いたものを、さう思ふと他人の心の情なさに思はず不覺の涙が零れるのであつた。

「僕出て行かう」

圭一郎は蒲團から匍ひ出たが、足がふら〳〵して眩暈を感じ昏倒しさうだつた。

千登世ははら〳〵し、彼の體軀につかまつて「およしなさい。そんな無理なことなすつちや取返しがつかなくなりますよ」と言つて、圭一郎を再寢かせようとした。

「だけど、馘首になるといけないから」

千登世は兩手を彼の肩にかけたまゝ、亂れ髪に蔽はれた蒼白い瓜實顏を胸のあたりに押當てて、※りあげた。「ほんたうに苦勞させるわね。すまない……」

「泣いちや駄目。これ位の苦勞が何んです！」

斯う言つて、圭一郎は即座に千登世を抱き締め、あやすやうにゆすぶり又背中を撫でてやつた。彼女は一層深く彼の胸に顏を埋め、獅噛みつくやうにして肩で息をし乍ら猶暫らく歔欷をつゞけた。

冷の牛乳を一合飲み、褞袍の上にマントを羽織り、間借して居る森川町新坂上の煎餅屋の屋根裏を出て、大學正門前から電車に乘つた。そして電柱に靠れて此方を見送つてゐる千登世と、圭一郎も車掌臺の窓から互ひに視線を凝つと喰ひ合してゐたが、軈て、風もなく麗かな晩秋の日光を一ぱいに浴びた靜かな線路の上を足早に横切る項低れた彼女の小さな姿が幽かに見えた。

永代橋近くの社に着くと、待構へてゐた主人と、十一月二十日發行の一面の社説についてあれこれ相談した。逞しい鍾馗髯を生やした主人は色の褪せた舊式のフロックを着てゐた。これから大阪で開かれる全國清酒品評會への出席を兼ねて伊勢參宮をするとのことだつた。猶それから白鷹、正宗、月桂冠壜詰の各問屋主人を訪ひ業界の霜枯時に對する感想談話を筆記して來るやうにとのことをも吩咐けて置いてそしてあたふたと夫婦連で出て行つた。

主人夫婦を玄關に送り出した圭一郎は、急いで二階の編輯室に戻つた。仕事は放擲らかして、机の上に肘を突き兩掌でぢくり〳〵と鈍痛を覺える頭を揉んでゐると、女中がみしり〳〵梯子段を昇つて來た。

「大江さん、お手紙」

「切拔通信？」

「いゝえ。春子より、としてあるの、大江さんのいゝ方でせう。ヒツヒツヒヽ」

圭一郎は立つて行つた、それを女中の手から奪ふやうにして※ぎ取つた。痘瘡の跡のある横太りの女中は巫山戲てなほからかはうとしたが、彼の不愛嬌な顰め面を見るときまりわるげに

階下へ降りた。そして、も一人の女中と何か囁き合ひ哄然と笑ふ聲が聞えて來た。

圭一郎は胸の動悸を堪へ、故郷の妹からの便りの封筒の上書を、充血した眼でぢつと視つめた。

圭一郎は遠いY縣の田舍に妻子を殘して千登世と駈落ちしてから四ヶ月の月日が經つた。最初の頃、妹は殆ど三日にあげず手紙を寄越し、その中には文字のあまり達者でない父の代筆も再三ならずあつた。彼はそれを見る度見る度に針を呑むやうな呵責の哀しみを繰返す許りであつた。身を切られるやうな思ひから、時には見ないで反古にした。返事も滅多に出さなかつたので、近頃妹の音信もずゐぶん遠退いてゐた。圭一郎は今も衝動的に腫物に觸るやうな氣持に襲はれて開封くことを躊躇したが、と言つて見ないではすまされない。彼は入口のところまで行つて少時階下の様子を窺ひ、それから障子を閉めて手紙をひらいた。

なつかしい東京のお兄さま。朝夕はめつきり寒さが加はりましたが恙もなくご起居あそばしますか。いつぞやは頂いたお手紙で、お兄さまを苦しめるやうな便りを差し上げては不可とあんなにまで仰云いましたけれ共、お兄さまのお心を痛めるとは十分存じながらも奈何しても書かずにはすまされません。それかと申して何から書きませうか。書くことがあまりに多い。……

お父さまは一週間前から感冒に罹られてお寢つてゐられます。それに持病の喘息も加つて

昨今の衰弱は眼に立つて見えます。こゝのとこ毎日安藤先生がお來診になつてカルシウムの注射をして下さいます。何んといつてもお年がお年ですからそれだけに不安でなりません。お父さまの苦しさうな咳聲を聞くたびにわたくし生命の縮まる思ひがされます。「俺が生きとるうちに何んとか圭一郎の始末をつけて置いてやらにやならん」と昨日も病床で仰云いました。腹這ひになつてお粥を召上り乍ら不圖思ひ出したやうに「圭一郎はなんとしとるぢやろ」と言はれると、ひとり手にお父さまの指から箸が辷り落ちます。夜は十二時、一時になつても奥のお座敷からお父さまお母さまの密々話の聲が洩れ聞えます。お兄さまも時にはお父さまに優しい慰めのお玉章差上て下さい。切なわたくしのお願ひです。お父さまがどんなにお兄さまのお便りを待つていらつしやるかといふことは、お兄さまには想像もつきますまい。川下からのぼつて來る配達夫をお父さまはあの高い丘の果樹園からどこに行くかを凝つと視おろしてゐられます。配達夫が自家に來てわたくし手招きでお兄さまのお便りだと知らすと、お父さまは狂氣のやうになつて、ほんとにこけつまろびつ歸つて來られます。迚も〳〵お兄さまなぞに親心が解つてたまるものですか。

凡そお兄さまが自家を逃亡れてからといふものは、家の中は全く灯の消えた暗さです。裏の欅山もすつかり黄葉して秋もいよ〳〵更けましたが、ものの哀れは一入吾が家にのみあつまつてゐるやうに感じられます。早稻はとつくに刈られて今頃は晩稻の收穫時で田圃は賑つてゐます。古くからの小作達はさうでもありませんけども、時二とか與作などは未だ臼挽

も濟まさないうちから強硬に加調米を値切つてゐます。要求に應じないなら斷じて小作はしないといふ劍幕です。それといふのも女や年寄ばかりだと思つて見縊つてゐるのです。「田を見ても山を見ても俺はなさけのうて涙がこぼれるぞよ」とお父さまは言ひ言ひなさいます。先日もお父さまは、鳶が舞はにや影もない——と唄には歌はれる片田の上田を買はれた時の先代の一方ならぬ艱難辛苦の話をなすつて「先代さまのお墓に申譯ないぞよ」と言つて、其時は文字通り暗涙に咽ばれました。お父さまはご養子であるだけに祖先に對する責任感が強いのです。田地山林を讓る吝嗇のお兄さまの居られないお父さまの歎きのお言葉を聞く度に、わたくしお兄さまを恨まずにはゐられません。

先日もお父さまが、あの鍛冶屋の向うの杉山に行つて見られますと、意地のきたない田澤の主人が境界石を自家の所有の方に二間もずらしてゐたさうです。お父さまは齒軋りして口惜しがられました。「圭一郎が居らんからこないなことになるんぢや。不孝者の餓鬼奴。今に罰が當つて眼がつぶれようぞ」とお父さまはさも〳〵憎しげにお兄さまを罵られました。しかし昂奮が去ると「あゝ、なんにもかも因緣因果といふもんぢやろ。お母ア諦めよう。……仕方がない。敏雄の成長を待たう。それまでに俺が死んだら何んとせうもんぞい」斯うも仰云いました。

咲子嫂さまを離緣してお兄さまと千登世さまとに歸つていたゞけば萬事解決します。しかし、それでは大江の家として親族への義理、世間への手前がゆるしません。咲子嫂さまは相

變らず一萬圓くれとか、でなかつたら裁判沙汰にするとか息巻いて、質の惡い仲人とぐるになつてお父さまをくるしめてゐます。何んといつてもお兄さまが不可いのです。どうして厭なら厭嫌ひなら嫌ひで嫂さまと正式に別れた上で千登世さまと一緒にならなかつたのです。あんな無茶なことをなさるから問題がいよ〳〵複雜になつて、相互の感情がこぢれて來たのです。今では縺を解かうにも緒さへ見つからない始末ぢやありませんか。

けれどもわたくしお兄さまのお心も理解してあげます。お兄さまとお嫂さまとの過ぎる幾年間の生活に思ひ及ぶ時、今度のことがお兄さまの一時の氣紛れな出來ごころとは思はれません。或ひは當然すぎる程當然であつたかもしれません。何時かの親族會議では咲子嫂さまを離緣したらいゝとの提議が多かつたのです。それを嫂さまは逸早く嗅知つて、一文も金は要らぬから敏雄だけは貰つて行くと言つて敏雄を連れていきなり實家に歸つてしまつたのです。しかも敏雄はお父さまにとつては眼に入れても痛くないたつた一粒の孫ですもの。敏雄なしにはお父さまは夜の眼も睡れないのです。お父さまはお母さまと一つしよに、Y町のお實家に詫びに行らして嫂さまと敏雄とを連れ戻したのです。迚も敏雄とお嫂さまを離すことは出來ません。離すことは慘酷です。いぢらしいのは敏ちやんぢやありませんか。

敏ちやんは性來の臆病から、それに隣りがあまり隔つてゐるので一人で遊びによう出ません。同じ年配の子供達が向うの田圃や磧で遊んでゐるのを見ると、堪へきれなくなつて涙を流します。時偶仲間が遣つて來ると小踊して歡び、仲間に歸られてはと、ご飯も食べないの

です。歸ると言はれると、ではお菓子を呉れてあげるから、どれ繪本を呉れてあげるからと手を替へ品を替へて機嫌をとります。いよいよかなはなくなると、わたくしや嫂さまに引留方を哀願に來ます。それにしても夕方になれば致し方がない。高い屋敷の庭先から黄昏に消えて行く友達のうしろ姿を見送ると、しくり〳〵泣いて家の中に駈け込みます。そしてお父さまの膝に乘つかると、そのまま夕飯も食べない先に眠つてしまひます。臺所の圍爐裡に榾柮を燻べて家ぢゆうの者は夜を更かします。お父さまは敏ちやんの寢顔を打戍り乍ら仰有います「圭一郎に瓜二つぢや喃」とか「燒野の雉子、夜の鶴——圭一郎は子供の可愛いといふことを知らんのぢやらうか」とか。

先月の二十一日は御大師樣の命日でした。村の老若は丘を越え橋を渡り三々五々にうち伴れてお菓子やお赤飯のお接待を貰つて歩きます。わたくしも敏雄をつれてお接待を頂戴して歩きました。明神下の畦徑を提籃さげた敏雄の手を扶いて歩いてゐると、お隣の金さん夫婦がよち〳〵歩む子供を中にして川邊りの往還を通つてゐるのが見えました。途端わたくし敏雄を抱きあげて袂で顔を掩ひました、不憫ぢやありませぬか。お兄さまもよく〳〵罪の深い方ぢやありませんか。それでも人間と言へますか。——わたくしのお胎内の子供も良人が遠洋航海から歸つて來るまでには産まれる筈です。わたくし敏ちやんの暗い運命を思ふ時慄然として我が子を産みたくありません。

お兄さまの居られない今日此頃、敏雄はどんなにさびしがつてゐるでせう、「父ちやん何

處?」と訊けば「トウキヨウ」と何も知らずに答へるぢやありませんか。「父ちやん、いつもどつてくる?」つて思ひ出しては嫂さまやわたくしにせがむやうに訊くぢやありませんか。敏ちやんはこの頃コマまはしをおぼえました、はじめてまはつた時の喜びつたらなかつたのです。夜も枕元に紐とコマとを揃へて寢に就きます。そして眼醒めると朝まだきから一人でまはして遊んでゐます。「父ちやん戻つたらコマをまはして見せる」つて言ふぢやありませんか。家のためにともお父さまお母さまのためにとも申しますまい。たつたひとりの敏雄のためにお兄さま、歸つては下さいませんでせうか。頼みます。

春子。

はじめの一章二章は丹念に讀めた圭一郎の眼瞼は火照り、終りのはうは便箋をめくつて駈け足で卒讀した。そして讀んだことが限りもなく後悔された。圭一郎は現在自分の心を痛めることをこの上なく惧れてゐる。と言つても彼は自分の行爲をあたまから是認し、安價に肯定してゐるのではなかつた。それは時には我乍ら必然の歩みであり自然の計らひであつたとは思はなくもないが、しかし、さういふ風に自分といふものを強ひて客觀視して見たところで、寢醒めのわるく後髪を引かれるやうな自責の念は到底消滅するものではなかつた。それなら甘んじて審判の笞を受けてもいゝ譯であるが、千登世との生活を血みどろになつて喘いでゐる最中、兎や斯う責任を問はれることは二重の苦しさであつて迚も遣切れなかつた。

圭一郎は濟まない氣持で手紙をくしや〳〵に丸め、火鉢の中に抛り込んだ。燒け殘りはマッチを摺つて痕形もなく燃やしてしまつた。彼の心は冷たく痲痺れ石のやうになつた。

室内が煙で一ぱいになつたので南側の玻璃窓を開けた。何時しか夕暮が迫つて大川の上を烏が唖々と啼いて飛んでゐた。こんな都會の空で烏の鳴き聲を聞くことが何んだか不思議なやうな、異樣な哀しさを覺えた。

南新川、北新川は大江戸の昔から酒の街と稱つてるさうだ。その南北新川街の間を流れる新川の河岸には今しがた數艘の酒舟が着いた。滿潮にふくれた河水がぺちやぺちやと石垣を舐める川縁から倉庫までの間に莚を敷き詰めて、その上を問屋の若い衆達が麻の前垂に捩鉢巻で菰冠りの四斗樽をころがし乍ら倉庫の中に運んでゐるのが、編輯室の窓から見下された。威勢のいゝ若い衆達の拍子揃へた端唄に聽くとはなしに暫らく耳傾けてゐる圭一郎は轉て我に返つて振向くと、窓下の狹い路地で二三人の子供が三輪車に乘つて遊んでゐた。一人の子供が泣顏をかいてそれを見てゐた。と忽ち、圭一郎の胸は張裂けるやうな激しい痛みを覺えた。

其年の五月の上旬だつた。圭一郎は長い間の醜く荒んだ惡生活から遁れるために妻子を村に殘してY町で孤獨の生活を送つてゐるうち千登世と深い戀仲になりいよ〳〵東京に駈け落ちしなければならなくなつた其日、彼は金策のために山の家に歸つて行つた。むしの知らせか妻はいつにもなく彼に附き纏ふのであつたが圭一郎は胸騷ぎを抑へ巧に父の預金帳を持出して家を出ようとした。ちやうど姉の子供が來合せてゐて三輪車を乘りまはして遊んでゐた。軒下に立

つて指を銜へ乍らさも羨ましさうにそれを見てゐた敏雄は、圭一郎の姿を見るなり今にも泣き出しさうな暗い顔して走つて來た。

「父ちやん、僕んにも三輪車買うとくれ」

「うん」

「こん度戻る時や持つて戻つとくれよう。のう?」

「うん」

「何時もどるの、今度あ?　のう父ちやん」

「……」

家の下で圓太郎馬車に乘る圭一郎を妻は敏雄をつれて送つて來た。馬丁が喇叭をプープー鳴らし馬が四肢を揃へて駈け出した時、妻は「又歸つて頂戴ね。ご機嫌好う」と言ひ、子供は「父ちやん、三輪車を忘れちや厭よう」と言つた。同じ馬車の中に彼の家の小作爺の三平が向ひ合せに乘つてゐた。「若さま。奥さんも坊ちやんも、あんたとご一緒にY町でお暮しなさんせよ。お可哀相ぢやごわせんかい」と詰るやうに三平は言つた。圭一郎の頭は膝にくつつくまで降つた。村境の土橋の畦で圭一郎が窓から顔を出すと、敏雄は門前の石段を老人のやうに小腰を曲げ、龜の子のやうに首を縮こめて、石段の數でもかぞへるかのやうに一つ〳〵悄々と上つて行くのが涙で曇つた圭一郎の眼鏡に映つた。おそらくこれがこの世の見納めだらう?　さう思ふと胸元が絞木にかけられたやうに苦しくなり、大粒の涙が留め度もなく雨のやうにポロ

〳〵落ちた。

其日の終列車で圭一郎は千登世を連れてY町を後にしたのである。

千登世は停留所まで圭一郎を迎へに出て仄暗い街路樹の下にしよんぼりと佇んでゐた。そして圭一郎の姿を降車口に見付けるなり彼女はつかつかと歩み寄つて「お歸り遊ばせ。お具合はどんなでしたの?」と潤んだ眼で視入り、眉を高く上げて言つた。

「氣遣つた程でもなかつた」

「さう、そんぢや好うかつたわ」勿論國訛が挟まれた。「わたしどんなに心配したかしれなかつたの」

外出先から歸つて來た親を出迎へる邪氣ない子供のやうに千登世は幾らか嬌垂ながら圭一郎の手を引つ張るやうにして、そして二人は電車通りから程遠くない隱れ家の二階に歸つた。行火で温めてあつた褥の中に逸早く圭一郎を這入らしてから千登世は古新聞を枕元に敷き、いそ〳〵とその上に貧しい晩餐を運んだ。二人は箸を執つた。

「氣になつて氣になつて仕樣がなかつたの。よつぽど電話でご容態を訊かうかと思つたんですけれど」

千登世は口籠つた。

さう言はれると圭一郎は棘にでも掻き※られるやうな氣持がした。彼は勤め先では獨身者ら

しく振る舞つてゐた。自分の行爲は何處に行かうと暗い陰影を曳いてゐたから、それで電話をかけるにしても階下の内儀さんを裝つて欲しいと千登世に其意を仄めかした時の慘酷さ辛さが新に犇と胸に痞へて、食物が咽喉を通らなかつた。

「今日ね、お隣りの奥さんがお縫物を持つて來て下すつたのよ」と千登世は言つて茶碗を置き片手で後の戸棚を開けて行李の上にうづだかく積んである大島や結城の反物を見せた。「こんなにどつさりあつてよ。わたし今夜から徹夜の決心で縫はうと思ふの。みんな仕上げたら十四五圓頂けるでせう。お醫者さまのお禮ぐらゐおくにに頼まなくたつてわたし爲て見せるわ」

「すまないね」圭一郎は病氣のせゐでひどく感傷的になつてゐた。

「そんな水臭いこと仰云つちや厭」千登世は怒りを含んだ聲で言つた。

食事が終ると圭一郎は服藥して蒲團を被り、千登世は箆臺をひろげて裁縫にかゝつた。

「あなた、わたしの方を向いてて頂戴」

千登世は顔をあげて絲をこき乍ら言つた。彼の顔が夜着の襟にかくれて見えないことを彼女はもの足りなく思つた。

「それから何かお話して頂戴、ね。わたしさびしいんですもの」

圭一郎は「あゝ」と頷いて顔を出し二言三言お座なりに主人夫婦が旅に出かけたことなど話柄にしたが、直ぐあとが次げずに口を噤んだ。折しも、妹の長い手紙の文句がそれからそれへと思ひ返されて腸を抉ぐられるやうな物狂はしさを感じた。深い愁ひにつゝまれた故郷の家の

有様が眼に見えるやうで、圭一郎は何んとしとるぢやろ、と言つて箸を投げて悲歎に暮るる老父の姿が、そして父ちやん何時戻つて來る？　とか、父ちやん戻つたらコマをまはして見せるとか言ふ眉の憂鬱な子供の面差が、又怨めしげに遣る瀬ない悲味を愬へた妻の顔までが、圭一郎の眼前に瀝々と浮ぶのであつた。しかも同じ自分の眼は千登世を打戍つてゐなければならなかつた。愛の分裂——と言ふ程ではなくとも、何んだか千登世を洗すやうな例へやうのない濟まなさを覺えた。

圭一郎はものごころついてこの方、母の愛らしい愛といふものを感じたことがない。母子の間には不可思議な呪詛があつた。人一倍求愛心の強い圭一郎が何時も何時も求める心を冷たく裏切られたことは、性格の相異以上の呪ひと言ひたかつた。圭一郎は廢嫡して姉に相續させたいと母は言ひ〳〵した。中學の半途退學も母への叛逆と悲哀とからであつた。もうその頃相當の年配に達してゐた圭一郎に小作爺の倅程の身支度を母はさして呉れなかつた。悶々とした彼がM郡の山中の修道院で石工をしたのもその當時であつた。だから一般家庭の青年の誰もが享樂しむことのできる青年期の誇りに充ちた自由な輝かしい幸福は圭一郎には惠まれなかつた。さうした彼が十九歳の時、それは傳統的な方法で咲子との縁談が持出された。咲子は母方の遠縁に當つてゐる未知の女であつたに拘らず、二歳年上であることが母性愛を知らない圭一郎には全く天の賜物とまで考へられた。そして眼隱された奔馬のやうな無智さで、前後も考へず有無なく結婚してしまつた。

結婚生活の當初咲子は豫期通り圭一郎を嬰兒のやうに愛し劬つてくれた。それなら彼は滿ち足りた幸福に陶醉しただらうか。すくなくとも形の上だけは琴と瑟と相和したが、けれども十九ではじめて知つた悅びに、この張り切つた音に、彼女の弦は妙にずつた音を出してぴつたり來ない。蕾を開いた許りの匂の高い薔薇の亢奮が感じられないのは年齡の差異とばかりも考へられない。一體どうしたことだらう？　彼は疑ぐり出した。疑ぐりの心が頭を擡げるともう自制出來る圭一郎ではなかつた。

「咲子、お前は處女だつたらうな？」

「何を出拔けにそんなことを……失敬な」

火のやうな激しい怒りを圭一郎は勿論冀うたのだが、咲子は怒つたやうでもあるし、怒り方の足りない不安もあつた。彼の疑念は深まるばかりであつた。そして蛇のやうな執拗さで間がな隙がな追究しずにはゐられなかつた。

「ほんたうに處女だつた？」

「女が違ひますよ」

「縱令、それなら僕のこの眼を見ろ。胡魔化したつて駄目だぞ！」

圭一郎はきつと齒を喰ひしばり羅漢のやうな怒恚れる眼を見張つた。

「幾らでも見ててあげるわ」と言つて妻は眸子を彼の眼に凝つと据ゑたが、直ぐへんに苦笑し、目叩し、

「そんなに疑ぐり深い人わたし嫌ひ……」

「駄目、駄目だ！」

何んと言つても妻の暗い翳を圭一郎は直感した。其後幾百回幾千回斯うした詰問を、敏雄が産まれてからも依然として繰返すことを止めはしなかつた。圭一郎はY町の妻の實家の近所の床屋にでも行つて髪を刈り乍ら他哩のない他人の噂話の如く裝つてそれとなく事實を突き留めようかと何遍決心したかしれなかつた。が、卒となると果し兼ねた。子供の時父の用箪笥から六連發のピストルを持出し、妹を目蒐けて撃つぞと言つて筒口を向け引金に指をかけた時、はつと思つて彈倉を覗くと六個の彈丸が底氣味惡く光つてをるではないか！　彼はあつと叫んで危なく失神しようとした。丁度それに似た氣持だつた。若し引金を引いてゐたらどうであつたらう。この場合若し圭一郎が髪床屋にでも行つて「それだ」と怖い事實を知つた曉を想像すると身の毛は彌立ちがた〳〵と戰慄を覺えるのだつた。

しかし遂には其日が來た。

圭一郎は中學二年の時柔道の選手であることから二級上の同じく選手である山本といふ男を知つた。眼のつつた、唇の厚い、鉤鼻の山本を圭一郎は本能的に厭がつた。上級對下級の試合の折、彼は山本を見事投げつけて以來、山本はそれをひどく根にもつてゐた。或日寄宿舍の窓から同室の一人が校庭で遊ぶ誰彼の顔を戲れにレンズで照してゐると、光線が山本の顔を射たのであつた。翌日山本はその惡戲した友が誰であるかを打明けろと圭一郎に迫つたが彼が頑な

に押默つてゐると山本は圭一郎の頰を平手で毆りつけた。――その山本と咲子は二年の間も醜關係を結んでゐたのだといふことを菩提寺の若い和尚から聞かされた。憤りも、恨みも、口惜しさも通り越して圭一郎は運命の惡戲に呆れ返つた。しかもこの結婚は父母が勸めたといふよりも自分の方が寧ろ強請んだ形にも幾らかなつてゐたので、誰にぶつかつて行く術もなく自分が自身の手負ひで蹣跚なければならなかつた。そして一日々々の激昂の苦しさはたゞ惘然と銷沈のくるしさに移つて行つた。

圭一郎は其後の三四年間を上京して傷いた心を宗教に持つて行かうとしたり慰めのための藝術に縋らうとしたり、咲子への執着、子供への煩惱を起して村へ歸つたり、又厭氣がさして上京したり、激しい精神の動搖から生活は果しもなく不聰明に頽廢的になる許りであつた。斯うした揚句圭一郎はY町の縣廳に縣史編纂員として勤めることになり、閑寂な郊外に間借して鄕土史の研究に心を紛らしてゐたのだが、そして同じ家の離れを借りて或私立の女學校に勤めてゐた千登世と何時しか人目を忍んで言葉を交へるやうになつた。

千登世の故鄕は中國山脈の西端を背負つて北の海に瀕した雪の深いS縣のH町であつた。彼女は産みの兩親の顏も知らぬ薄命の孤兒であつて、伯父や伯母の家に轉々と引き取られて育てられたが、身内の人達は皆な揃ひも揃つて貪婪で邪慳であつた。十四歲の時伯父の知邊である或る相場師の養女になつてY町に來たのであつた。相場師夫婦は眞の親も及ばない程千登世を慈んで、彼女の望むまゝに土地の女學校を卒業さした上更に臨時教員養成所にまで進學さして

くれたのだが、業半でその家が經濟的に全く崩壞してしまひ、軈て養父母も相次いで世を去つてしまつたので、彼女は獨立しなければならなかつた。

さうして薄倖の千登世と圭一郎とが互ひに身の上を打明けた時、二人は一刻も猶豫して居られず忽ち東京に世を憚らねばならぬ仲となつた。

千登世はさすがに養父母の恩惠を忘れ兼ねた。わけても彼女に優しかつた相場師の臨終を物語つてはさめ〳〵〳〵と涙をこぼした。寒い霰がばら〳〵と板戸や廂を叩き、半里許り距離の隔つてゐる海の潮鳴が遙かに物哀しげに音づれる其夜、千登世は死人の體に抱きついて一夜を泣き明したことを繰返しては、人間の浮生の相を哀しみ、生死のことわりを諦めかねた。彼女はY町の偏邊の荒れるに委せた墳墓のことを圭一郎が厭がる程屢〳〵口にした。まだ新しい石塔を建ててなかつたこと、二三本の卒塔婆が亂暴に突きさゝれた形ばかりの土饅頭にさぞ雜草が生ひ茂つてゐるだらうことを氣にして、窃つと墓守に若干のお鳥目を送つてお墓の掃除を頼んだりした。

千登世の無常觀——は過去の閲歴から育まれたのだつた。時折りその感情が潮流のやうに一時に彼女に歸つて來ては彼女をくるしめた。校正で據なく歸りの遲くなつた夜など、電車の送迎に忙しいひけ時から青電車の時刻も迫つて絶間々々にやつて來る電車を、一臺送つては次かと思ひ、又一臺空しく送つては次かと思ひ、夜更けの本郷通は鎭まつて、鋪道の上の人影も絶えてしまふその頃まで猶も一徹に圭一郎の歸りを今か〳〵と待ちつゞけずにはゐられない千登

世の無常觀は到底圭一郎などの想像もゆるさない計り知れない深刻なものであつた。

次の日の午前中に圭一郎は主人に命じられた丈の仕事は一氣に片付けて午後は父と妹とに宛て長い手紙を書き出した。

「僕は幾ら非人間呼ばはりをされようと不孝者の謗りを受けようと更に頭はあがらないのです。けれども千登世さんだけはわるく思つて下さいますな。何が辛いといつても一番辛いことはお父さんや春子に彼女が惡者の如く思はれることです。然う思はれても僕のこの身に罰が當ります。僕の身に立つ瀬がないのですから」斯うした意味のことを疊みかけ疊みかけ書かうとした。

圭一郎はこれまで幾回も同じ意味のことを、千登世に不憫をかけて欲しいといふことを父にも妹にも書き送つたが、どうにも抽象的にしか書けない程自分自身が疚しかつた。

生活の革命——さういふ文字が齎す高尚な内容が圭一郎の今度の行爲の中に全然皆無だといふのではなく、寧ろさうしたものが多量に含まれてあると思ひたかつた。が、靜かに顧みて自問自答する時彼は我乍ら唾棄の思ひがされ冷汗のおのづと流れるのを覺えた。

妻の過去を知つてからこの方、圭一郎の頭にこびりついて須臾も離れないものは「處女」を知らないといふことであつた。村に居ても東京に居ても束の間もそれが忘れられなかつた。往來で、電車の中で異性を見るたびに先づ心に映るものは容貌の如何ではなくて、處女だらうか？　處女であるまいか？　といふことであつた。あはよくば、それは奇蹟的にでも闇に咲く女

の中にさうした者を探し當てようとあちこちの魔窟を毎夜のやうにほつつき歩いたこともあつた、縦令、乞丐の子であつても介意ふまい。假令獄衣を身に纏ふやうな恥づかしめを受けようと、レエイプしてもとまで屡思ひ詰めるのだつた。

根津の下宿に居たある年の夏の夜、圭一郎は茶の間に招かれて宿のをばさんと娘の芳ちやんと二人で四方山の話をした。キヤツキヤツ燥いでゐた芳ちやんは間もなく長火鉢の傍に寝床をのべて寝てしまつた。暑中休暇のことで階上も階下もがら空きで四邊はしんと鎭まつてゐた。忽ち足をばた〳〵させて蒲團を蹴とばした芳ちやんは眞つ白な兩方の股を弓のやうに踏張つた。と、つ……みたいなものが瞥と圭一郎の眼に這入つた。

「あら、芳ちやん厭だわ」

をばさんは急いで蒲團をかけた。圭一郎は赧らむ顔を俯向いて異樣に沸騰る心を抑へようとした。をばさんさへ居なかつたらと彼は齒をがた〳〵顫はした。彼の頭に蜘蛛が餌食を卷き締めて置いて咽喉を食ひ破るやうな殘忍的な考が閃めいたのだ。

斯うした獸的な淺間しい願望の延長——が千登世の身體にはじめて實現されたのであつた。彼は多年の願ひがかなへられた時、最早前後を顧慮する遑とてもなく千登世を拉し去つたのであるが、それは合意の上だと言へば言へこそすれ、ゴリラが女を引浚へるやうな慘虐な、ずゐぶん兇暴なものであつた。もちろん圭一郎は千登世に對して無上の恩と大きな責任とを感じてゐた。飛んで灯に入る愚な夏の蟲にも似て、彼は父の財産も必要としないで石に齧りついても

千登世を養ふ決心だつた。が、自分ひとりは覺悟の前である生活の苦闘の中に羸弱い彼女までその渦の中に巻きこんで苦勞させることは堪へ難いことであつた。

圭一郎は、父にも、妹にも、誰に對しても告白のできぬ多くの懺悔を、痛みを忍んで我と我が心の底に迫つて行つた。

結局、故郷への手紙は思はせ振りな空疎な文字の羅列に過ぎなかつた。けれども一國な我儘者の圭一郎に傅いて嘸々氣苦勞の多いことであらうとの慰めの言葉を一言千登世宛に書き送つて貰ひたいといふことだけはいつものやうに冗く、二伸としてまで書き加へた。

圭一郎が父に要求する千登世への劬りの手紙は彼が請ひ求めるまでもなくこれまで一度ならず二度も三度も父は寄越したのであつた。父は最初から二人を別れさせようとする意志は微塵も見せなかつた。別れさしたところで今さらをめ〳〵村に歸つて自家の閾が跨がれる圭一郎でもあるまいし、同時に又千登世に對して犯した我子の罪を父は十分感じてゐることも否めなかつた。鼎の湯のやうに沸き立つ喧しい近郷近在の評判や取々の沙汰に父は面目ながつて暫らくは一室に幽閉してゐたらしいが其間も屡便りを送つて來た。さま／〴〵＼の愚痴もならべられてあるにしても、何うか二人が仲よく暮らして呉れとかお互に身體さへ大切にして長生してゐれば何時か再會が叶ふだらうとか、其時はつもる話をしようとか書いてあつた。そして定つたやうに「何もインネンインガとあきらめ居候」として終りが結んであつた。時には思ひがけなく隣村の郵便局の消印で爲替が封入してあることも度々だつた。村の郵便局からでは顔馴染の局

員の手前を恥ぢて、杖に縋りながら二里の峻坂を攀ぢて汗を拭き〳〵峠を越えた父の姿が髣髴して、圭一郎は極度の昂奮から自殺してしまひたいほど自ら責めた。

圭一郎は何處に向かはうと八方塞がりの氣持を感じた。心に在るものはたゞ身動きの出來ない呪縛のみである。

圭一郎は社を早目に出て蠣殻町の酒問屋事務所に立寄つて相場を手帳に記し、それから大川端の白鷹正宗の問屋を訪うてそこの主人の額に瘤のある大入道から新聞の種を引出さうとあせつてゐるうちに電氣が來た。屋外へ出るともう四邊は眞つ暗だつた。川口を通ふ船の青い灯、赤い灯が暗い水の面に美しく亂れてゐた。

彼は更に上野山下に廣告係の家を訪ねたが不在であつた。廣小路の夜店でバナナを買ひ、徒歩で切通坂を通つて歸つた。

食後、千登世はバナナの皮を取りながら、

「でも樂になりましたね」と、沁々した調子で言つた。

「さうね……」

圭一郎も無量の感に迫られた。

「あの時、わたし……」彼女は言ひかけて口を噤んだ。

あの時——と言つた丈で二人の間には、その言葉が言はず語らずのうちに互の胸に傳はつた。

圭一郎は父の預金帳から四百圓程盗んで來たのであつたが、それは一二ヶ月の間になくしてしまつた。そして一日々々と生活に迫られてゐたのであつた。食事の時香のものの一片にも二人は顔見合はせて箸をつけるといふ風だつた。彼は血眼になつて職業を探したけれど駄目だつた。

「わたし、三越の裁縫部へ出ませうか、あそこなら何時でも雇つてくれるさうですから」

千登世は健氣に言つたが、圭一郎は情なかつた。

丁度その時、酒新聞社の編輯者募集を職業案内で見つけて、指定の日時に遣つて行つた。彼が二十幾人もの應募者の先着だつた。中にはほんのちよつとした應對で飽氣なく斷られる奴もあつて、殘る半數の人たちに、主人は、銘々に文章を書かせてそれをいち〳〵手に取上げて讀んでは又片つ端から慘く斷り、後に圭一郎と、口髭を立派に刈込んだ金緣眼鏡の男と二人程殘つた。主人は圭一郎に、

「とに角、君は、明日九時に來て見たまへ」と、言つた。

「眞面目にやりますから、どうぞ使つて下さい。どうぞよろしくお願ひいたします」

圭一郎は丁寧にお叩頭して座を退り齒のすり減つた日和をつつかけると、もう一度お叩頭をしようと振り返つたが、衝立に隱れて主人の顏は見えなかつた。圭一郎は、如何にも世智にたけたてきぱきした口調で、さも自信ありさうに主人に話し込んでゐる金緣眼鏡の男の横面を、はりつけてやりたい程憎らしかつた。

屋外に出るとざつと大粒の驟雨に襲はれた。家々の軒下を潛るやうにして走つたり、又暫ら

く銀行の石段で雨宿りしたりしてゐたが、思ひ切つて鈴成りに混だ電車に乗つた時は圭一郎は濡れ鼠のやうになつてゐた。停留所には千登世が迎へに出て土砂降の中を片手で傘を翳し片手で裾を高く掻きあげて待つてゐた。そして、降車口に圭一郎のずぶ濡れ姿を見つけるなり、千登世は急ぎ歩み寄つて、

「まあ、お濡れになつたのね」と眉根に深い皺を刻んで傷々しげに言つた。

圭一郎は千登世の傘の中に飛び込むと、二人は相合傘で大學の正門前の水菓子屋の横町から暗い路地に這入つて行つた。歩きながら圭一郎は酒新聞社での様子をこま／〃＼千登世に話して聽かせた。

「とに角、明日も一度來て見ろと言つたんですよ」

「ぢや、屹度、雇ふ考へですよ」

と彼女は言つたが、これまで屡繰り返されたと同じやうな空頼みになるのではあるまいかといふ豫感の方が先に立つて千登世はそれ以上ものを言ふのが辛かつた。

「雇つてくれるかもしれん……」

圭一郎は口の中で呟いた。けれ共、頼み難いことを頼みにし獨り決めして置いて、後で又しても千登世を失望させてはと考へた。さう思へば思ふ程、金縁眼鏡の男がうらめしかつた。

「ほんたうに雇つてくれるといゝが……」

圭一郎は思はず深い溜息を洩らした。

「悄氣ちや駄目ですよ、しつかりなさいな」

斯う千登世は氣の張りを見せて圭一郎に元氣を鼓舞ようとした。が、濡れしをれた衣服の裾がべつたり脚に纏つて歩きにくさうであり、長く伸びた頭髪からポトリ〳〵と雫の滴る圭一郎のみじめな姿を見た千登世の眼には、夜目にも熱い涙の玉が煌めいた。

運好く採用されたのだつたが、千登世はその夜のことを何時までも忘れなかつた。「わたし泣いてはいけないと思つたんですけれど、あの時——だけは悲しくて……」彼女は思ひ出しては時々それを口にした。

千登世は食後の後片づけをすますと、寛いだ話もそこ〳〵に切り上げ暗い電燈を眼近く引き下して針仕事を始めた。圭一郎は檢温器を腋下に挟んでみたが、まだ平熱に歸らないので直ぐ寢床に這入つた。

壁一重の隣家の中學生が頓狂な發音で英語の復習をはじめた。

What a funy bear !

「あゝ煩さい。もつと小さな聲でやれよ」兄の大學生らしいのが斯う窘める。

中學生は一向平氣なものだ。

Is he strong ?

「煩さいつたら！」兄は悍り立つた金切聲で叱り附けた。

圭一郎と千登世とは思はず顔を合せて、クス〳〵笑ひ出した。が、直ぐ笑へなくなつた。そ

の兄弟たちの希望に富む輝かしい將來に較べて、自分達の未來といふものの何んとさびしい目當てのないものではないかといふ氣がして。

　軈て、夜番の拍子木の音がカチ〳〵聞えて來る時分には、中學生の寢言が手に取るやうに聞える。夢にまで英語の復習をやつてるらしい。階下でも内儀さんが店を閉めた。四邊は深々と更けて行く。筋向うの大學の御用商人とかいふ男が醉拂つて細君を呶鳴る聲、器物を投げつける烈しい物音がひとしきり高かつた。暫らくすると支那蕎麥屋の笛が聞えて來た。

「あら、また遣つて來た！」

　千登世は感に迫られて針持つ手を置いた。

　千登世は、今後、この都を去つて何處かの山奥に二人が侘住ひするやうになつても、支那蕎麥屋の笛の音だけは忘れ得ないだらうと言つた。——駈落ち當時、高徳の譽高い淨土教のG師が極力二人を別れさせようとした。そのG師の禪房に曾つて圭一郎は二年も寄宿し、G師に常隨してその教化を蒙つてゐた關係上、上京すると何より眞つ先きにG師に身を寄せて一切をぶちまけなければ措けない心の立場にあつたのだ。G師の人間的な同情は十分持ち乍らも、しかし、G師自身の信仰の上から圭一郎の行爲を是認して見遁すことはゆるされなかつた。G師は毎夜のやうに圭一郎を呼び寄せて「無明煩惱シゲクシテ、妄想顚倒ノナセルナリ」……今は水の出端で思慮分別に事缺くけれど、直に迷ひの目がさめるぞ、斯うした不自然な同棲生活の終に成り立たざること、心の負擔に堪へざること、幻滅の日、破滅の日は決してさう遠くはない

ぞ、一旦の妄念を棄て別れなければならぬ。――斯う諄々と説法した。圭一郎は生木を裂かれるやうな反感を覺えながらも、しかし、故郷の肉親に對する斷ち難き愛染は感じてゐるのだから、そして心の呵責は渦を卷いてゐるのだから、そこの虚を衝かれた日には良心的に實際適はない感じのものだつた。圭一郎がG師から兎や斯うきつい説法を喰つてゐる間、千登世は二階で一人わびしく圭一郎の歸りを待ちながら、人通りの杜絶えた路地に彼の下駄の音を今か〳〵と耳を澄ましてゐる時、この支那蕎麥屋の笛を聞いて、われを忘れて慟哭したといふのである。千登世にしてみれば、別れろ〳〵と攻め立てられてG師の前に弱つて首垂れてゐる圭一郎がいぢらしくもあり、恨めしくもあり、否、それにも増して、暗い過去ではあつたがどうにか弱い身體と弱い心とを二十三歳の年まで潔く支へて來た彼女が、選りも選んで妻子ある男と駈落ちまでしなければならなくなつた呪うても足りない宿命が、彼女にはどんなにか悲しく、身を引き裂きたい程切なかつたことであらう……。

　支那蕎麥屋は家の前のだら〳〵坂をガタリ〳〵車を挽いて坂下の方へ下りて行つたが、笛の音だけは鎭まつた空氣を劈いて物哀しげに遙かの遠くから聞えて來た。一瞬間、何んだか北京とか南京とかさうした異郷の夜に、罪業の、さすらひの身を隱して憂念愁怖の思ひに沈んでゐる自分達であるやうにさへ想へて、圭一郎もうら悲しさ、うら寂しさが骨身に沁みた。

「もう寢なさい」と圭一郎は言つた。

「えゝ」

と答へて千登世は縫物を片付け、ピンを抜き髪を解し、寝巻に着替へようとしたが、圭一郎は彼女の窶れた裸姿を見ると今更のやうにぎよつとして急いで眼を瞑つた。

圭一郎の月給は當分の間は見習ひとして三十五圓だつた。それでは生活を支へることがむづかしいので不足の分は千登世の針仕事で稼ぐことになり「和服御仕立いたします」と書いた長方形の小さなボール紙を階下の路地に面した戸袋に貼りつけた。幸ひ近所の人達が縫物を持つて來てくれたのでどうにか月々は凌げたが、その代り期日ものなどで追ひ攻められて徹夜しなければならないため、千登世の健康は殆ど臺なしだつた。

「こんなに髪の毛がぬけるのよ」

千登世は朝髪を梳く時ぬけ毛を束にして涙含み乍ら圭一郎に見せた。事實、彼女の髪は痛々しい程減つて、添へ毛して七三に撫でつけて髷を引き※しられた小鳥の肌のやうな隙間が見えた。圭一郎の心の底から深い憐れさが沁み出して來るのであつたが、彼女の涙も度重なると、時には自分達の存在が根柢から覆へされるやうな憤りさへ覺えた。さう言つて責めてくれるな！　と哀訴したいやうな、苦しいのはお互ひさまではないか！　と斯う彼女の弱音に荒々しい批難と突つ慳貪な叱聲を向けないではゐられないエゴイスチックな衝動を感じた。

酷い夏痩せの千登世は秋風が立つてからもなか〳〵肉付が元に復らなかつた。顔はさうでもなかつたけれど、といつても、二重顎は一重になり、裸體になつた時など肋骨が蒼白い皮膚の上に層をなして浮んで見えた。腰や腿のあたりは乾草のやうにしなびてゐた。ひとつは榮養不

良のせゐもあつたが……。

圭一郎はスウ〳〵小刻みな鼾をかき出した細つこい彼女を抱いて睡らうとしたが、急に頭の中がわく〳〵と口でも開いて呼吸でもするかのやうに、そしてそれに伴つた重苦しい鈍痛が襲つて來た。彼はチカ〳〵眼を刺す電燈に紫紺色のメリンスの風呂敷を巻きつけて見たが又起つて行つて消してしまつた。何も彼も忘れ盡して熟睡に陷ちようと努めれば努める程彌が上にも頭が冴えて、容易に寢つけさうもなかつた。

立てつけのひどく惡い雨戸の隙間を洩るゝ月の光を面に浴びて白い括枕の上に髮こそ亂して居れ睫毛一本も動かさない寢像のいゝ千登世の顏は、さながら病む人のやうに蒼白かつた。故郷に棄てて來た妻や子に對するよりも、より深重な罪惡感を千登世に感じないわけには行かない。さう思ふと何處からともなく込み上げて來る強い憐愍がひとしきり續く。かと思ふとポカンと放心した氣持にもさせられた。

全體これから奈何すればいゝのか？　又奈何なることだらうか？　圭一郎は幾度も〳〵寢返りを打つた。——

（昭和三年）

青空文庫情報

底本：「日本文學全集　34　梶井基次郎　嘉村礒多　中島敦集」新潮社
　　1962（昭和37）年4月20日発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
入力：伊藤時也
校正：小林繁雄
2001年2月27日公開
2005年12月3日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

業苦

嘉村礒多

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/